

本書の特徴

- 研究者に渴望されながら、所在不明の原本が多いため復刻が不可能であった本書を、今回初めて集大成。
- 日本近代において「グラフィック・デザイン」という分野を確立したこの雑誌の全貌を、細部に至るまで正確に完全復刻。
- 欧米4カ国語を併記し、写真を中心に構成された美しいレイアウトの誌面を、最高の技術で再現。
- 現代写真界の基盤を築いた巨匠たちの撮影した写真が満載。
- 戦前期の対外宣伝の様相と共に、当時の社会状況をも克明に写し出す貴重な資料。
- 有名作家・評論家等の今まで知られていなかった作品を数多く掲載。

『NIPPON』第1号目次 (昭和9年10月発行)

四十七士の墓に詣でて……カリクシト・ホイット・マルシ (仏語)
 火山の下で——軽井沢・日光……マルグリット・ギルモア (仏語)
 現代日本と文化……トウ 伊能 (英語)
 東京市と市長……レイ・リチャード (英語)
 日本の近代建築……市浦 健 (英語)
 女性の世界……ゾー・キンケイド (英語)
 現代日本の文学……杉山平助 (独語)
 美術界展望……荒城季夫 (英語)
 写真家紹介……(独語)
 日本の舞踊……光吉夏弥 (独語)
 現代日本の音楽……須永克己 (独語)
 日本経済飛躍の概括的原因……高橋亀吉 (英語)
 織物工業……(英語)
 歌舞伎芝居・初日を開けるまで……三宅三郎 (英語)
 新劇運動……北村喜八 (独語)
 日本映画の発達……板垣應徳 (英語)
 1933年の日蝕……(英語)
 日本の国立公園……(英語)
 日本の自動車道……(英語)
 水泳……(英語)
 詩「印象」……堀口大学 (スペイン語)
 日本における文化交流の運動……(英語)
 旅行案内……(英・独・仏・スペイン語)
 日本の商業美術……(仏語)

『NIPPON』第10号目次

〈日本婦人号〉
 日本婦人について……与謝野品子 (英語)
 日本の女子教育……長谷川如足閑 (独語)
 外国人から見た日本婦人……エステン・バルク (独語)
 主婦になるために……飯島 実 (英語)
 趣味の生活……小林正寿 (英語)
 制服の職業婦人……(英・独・仏語)
 地方の娘……(英・独・仏語)
 伸びゆく日本女性……東 龍太郎 (独語)
 彼女の1週間……戸川エマ (英語)
 花嫁道具……(英・独・仏語)
 婦人調度品点描……(仏・英・独語)
 「手古奈」……矢田津世子 (仏語)
 前線に躍る人々
 日本の女流思想文芸家……杉山平助 (英語)
 現代女流科学者……式場隆三郎 (独語)
 音楽・舞踊界の女性群……塩入亀輔 (仏語)
 女優登場……北村喜八 (英語)
 美術工芸界の闊秀作家……広川松五郎 (仏語)
 東京オリンピック大会を目指して……川本信正 (英語)
 大阪市立電気科学博物館……(英語)
 新刊紹介……(英語)



『NIPPON』第4号目次

日本における英文書籍……(英語)
 日本を研究せよ……広田弘毅 (英語)
 日本の航空路……河田一彦 (独語)
 熱河……関野 貞 (仏語)
 人物紹介——高橋是清・横山大観・市川左団次・小泉信三……(英・独・仏・スペイン語)
 海洋と日本精神……大角岑生 (仏語)
 国民生活の安定と国際協力……郷 誠之助 (英語)
 大学と同窓……小泉信三 (仏語)
 日本女性の魅力はどこにあるか……(仏語)
 日本の郷土舞踊……小寺融吉 (独語)
 シーボルト……木村 毅 (英語)
 童話「桃太郎」……坪田譲治 (仏語)
 日本の鳥類について……下村兼二 (英語)
 日本のゴルフ……赤星四郎 (英語)
 新刊紹介……(英・独・仏語)



2002年春 第1期全12冊刊行!!

- B4変型判・上製セット函入 第1期収録巻：No.1～No.12 全12冊揃定価：本体95,000円＋税 (分売不可)
- ISBN4-336-04389-2 [続刊予定]
- 第2期 (2002年夏予定) 収録巻：No.13～No.24
- 第3期 (2002年冬予定) 収録巻：No.25～No.36＋別冊

発行 国書刊行会

〒174-0056 東京都板橋区志村1-13-15
 TEL 03-5970-7421 FAX 03-5970-7427
 e-mail : info@kokusho.co.jp http://www.kokusho.co.jp

●取扱店



名取洋之助、亀倉雄策、土門拳、山名文夫——近代日本のデザイン、写真、グラフィック・ジャーナリズムの巨人たちが一堂に会した戦前期の対外宣伝誌『NIPPON』。その奇跡的な成果を余すところなく完全復刻!



復刻版 NIPPON



国書刊行会

監修のことば

—『NIPPON』復刻にあたって—

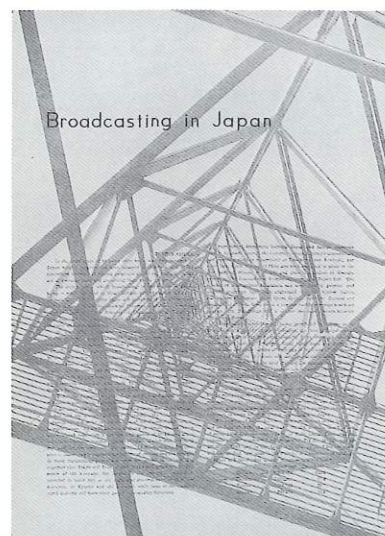
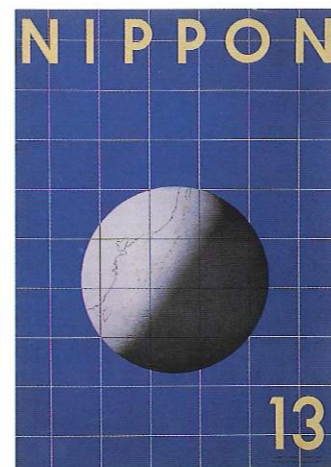
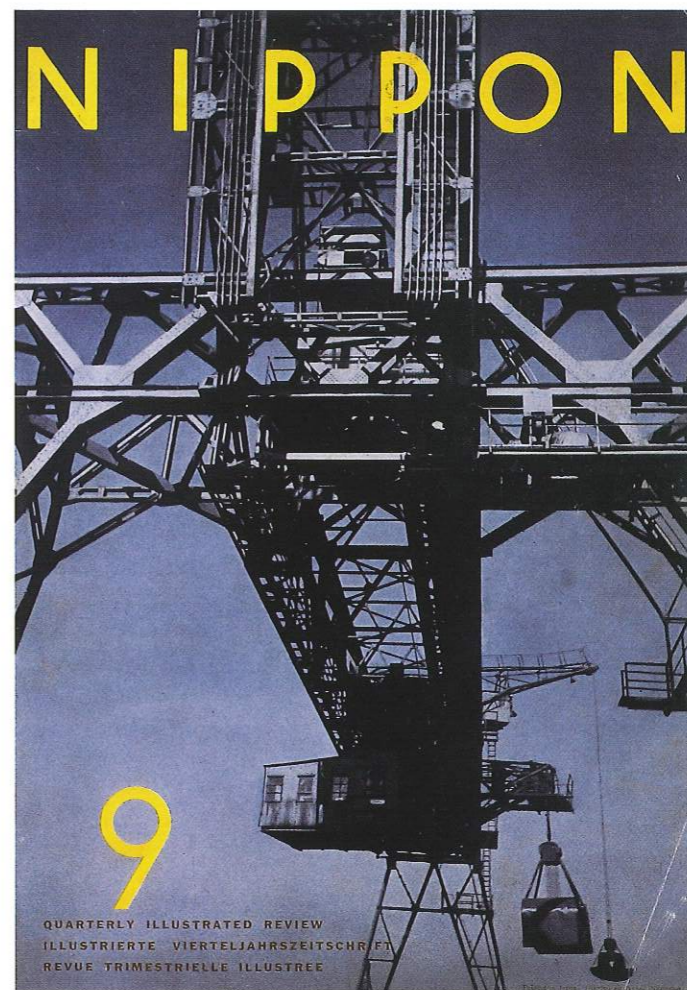
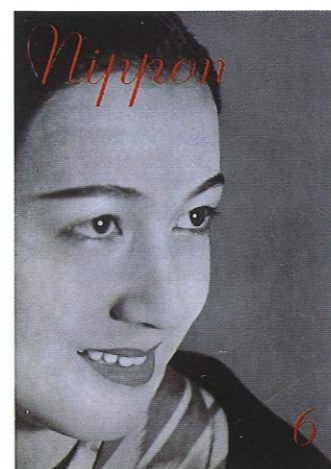
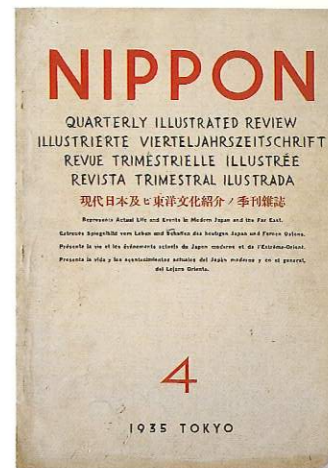
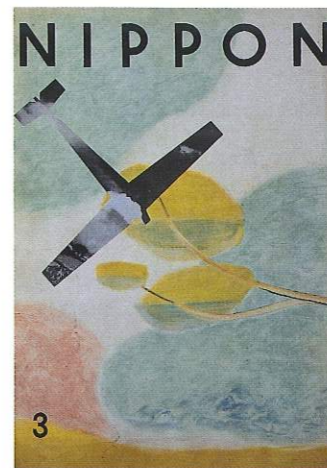
金子隆一 (写真史家)

1920年代における「写真」の近代化は、カメラやレンズ、感光材料の機能を十二分に生かすことに始まった。同時に、写真を大量複製（印刷）し、視覚伝達メディアとして社会化することでもあった。この動向は、1930年代に入り日本では「報道写真」の名の下に様々な追求が実践されてゆく。

1934年10月、名取洋之助が主宰する日本工房から創刊された『NIPPON』は、その「報道写真」を実践する雑誌であった。当時最高のスタッフと印刷技術を駆使して制作された各号は、ヨーロッパの先進的なグラフ雑誌と比べて、優るとも決して劣ることのない内実を持つものである。グラフィックに展開される誌面は、メディアとしての写真を近代的に機能させたものと言えよう。

また、『NIPPON』は対外文化宣伝グラフ雑誌として、戦争へ向かい始める日本の国際的なイメージを発信するメディアでもあった。それゆえ『NIPPON』は、1930年代を中心とする日本の報道写真、グラフィックデザインそして印刷技術の粋を示すだけでなく、日本の国際戦略を読み解く格好の雑誌なのである。

今回の復刻は、通常号だけではなく日本版や特別号など『NIPPON』の多岐にわたる刊行物を網羅することを最終目標としている。これまで研究者や専門家の間でも「幻」であったその全貌を明らかにすることは、『NIPPON』という雑誌がいったい何をなそうとし、何がなしたかを明らかにするに違いないことを確信する。



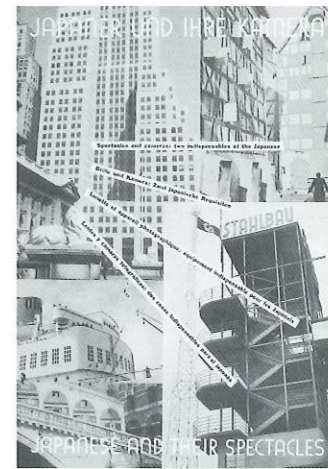
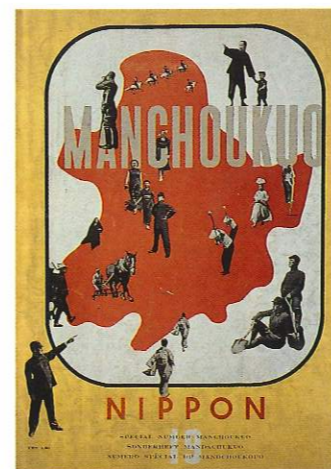
日本工房について

ドイツから帰朝し、フォトジャーナリストとして活躍していた名取洋之助が中心となり、木村伊兵衛、伊奈信男、原弘、岡田桑三によって1933(昭和8)年に設立された同人組織。大宅壮一、高田保、林達夫といった文化人も出入りし、報道写真やグラフィックアートの新しい思想と技術を日本で広め、その方法で現代の日本を世界に紹介するという目標を持っていた。しかし二つの展覧会を開催後組織は分裂し、翌年名取以外のメンバーは中央工房を設立。名取は日本工房(第二次)を再建し、『NIPPON』の刊行を始める。1939(昭和14)年、国際報道工芸株式会社と改称し、戦時下において内閣情報局のもと『MANCHOUKUO』、『COMMERCE JAPAN』などの対外宣伝誌を発行するが、終戦とともに解散した。また分裂した中央工房は後に東方社へと発展し、同じく対外宣伝誌『FRONT』を発行して、共に戦前・戦中期における報道写真とグラフィックデザインの絶頂期を形成することになった。

日本

雑誌『NIPPON』について

大誌面をいっぱいに使った大胆なレイアウト、清新な写真と一流の執筆者を揃え、英・仏・独・スペイン語で刊行した雑誌『NIPPON』。山名文夫、河野鷹思、亀倉雄策ら日本を代表するデザイナーと、名取洋之助をはじめとして土門拳、藤本四八、木村伊兵衛などの切れ味鋭い写真を合体させ、当時における最高水準の印刷技術を駆使して刊行されたこの対外宣伝雑誌は、近代日本のグラフィックデザインや写真表現に、またアートデレクションや広告技術に、飛躍的な発展をもたらした。西欧にひけをとらないレベルの雑誌を日本で作りたいという名取洋之助の熱情はこの『NIPPON』に結実した。戦後においても各方面で活躍する人材を輩出する源となったのである。

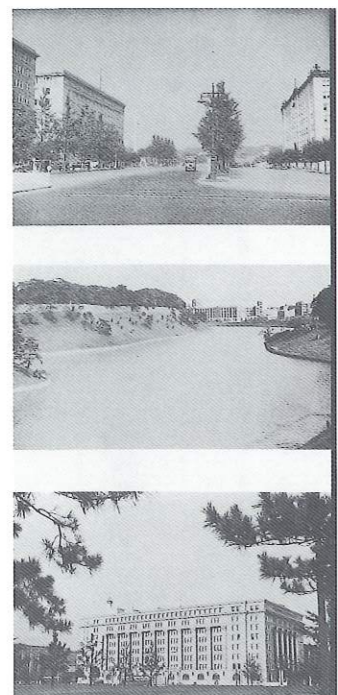


日本戦前文化の高峰

山口昌男 (札幌大学学長)

戦前の日本で世界の一流国の文化に匹敵する高水準のものがなかったというのは大きな誤りであることが、この10年間ぐらいの間で次第に明らかになってきた。

その時代に国際的に肩を並べることでできた文化的達成の一つは、石原莞爾の情報戦略論とこの雑誌『NIPPON』の刊行であった。石原の場合、人間の集団の動きを戦術において編集し、また様々な情報を集めてこれを戦略において編集し、纏めあげることであったが、イメージにおいて時代をもっとも斬新な方法で切り取り、編集したものが『NIPPON』であった。『NIPPON』は写真家、グラフィックデザイナー、知的思索家の生み出したイメージと情報と思考を編集することによって、戦後の出版を方向付ける知的・美的文化を創り出し、これは未だに越えられていない。この復刻は、そういう時代を垣間見せてくれる貴重な試みである。



甦った幻の『NIPPON』

下島正夫 (元多摩美術大学教授・日本工房美術部グラフィックデザイナー)

今から67年前の『NIPPON』創刊当時、海外列強の中にあつて、日本の対外宣伝は、明治時代以来の旧態依然とした状況下、著しく立ち遅れていた。

名取洋之助は18歳で渡独、ミュンヘン美術工芸学校に学んだ後、ウルシュタイン社やのちに「ライフ」誌などで国際報道カメラマンとして活躍。1932(昭和7)年帰朝して、新進気鋭のカメラマン、グラフィックデザイナーを結集育成しつつ、その溢れんばかりの若さと天与の才能を遺憾なく発揮し、西欧に劣らないグラフ誌を刊行しようとした。能う限りの人材と小型カメラを駆使、写真製版技術において可能な限りの最高をめざして総指揮をとったのである。敗戦と共に膨大な原板も失って、幻の本といわれるようになってしまったが、日本工房から育った草分けの人材たちはその後、日本のヴィジュアル・コミュニケーションをリードすることとなり、大きな足跡を残したのである。

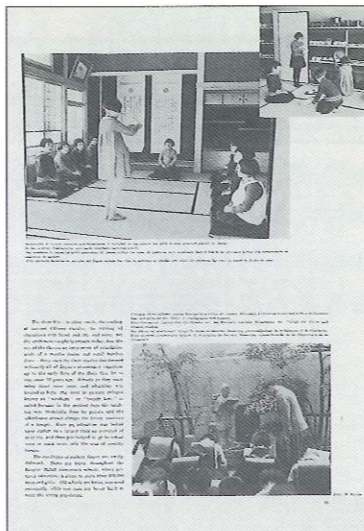
このたび、その幻の『NIPPON』が復刻され甦ることになった。かつて日本工房に参加し仕事をした僅かな生き残りの一人である私にとって、至上の感銘であると共に、名取をはじめ、その仕事に携わったすべての故人先輩たちに、その喜びを捧げたい。併せて、向後、カメラマン、デザイナーを志向する方たちに是非ともお薦めしたい。

日本の近代グラフィックデザインの白眉

柏木 博 (評論家・武蔵野美術大学教授)

戦前の日本のグラフィックデザインあるいは広くグラフィズムのいわゆる「近代主義」が、どのようなものであったのかということの研究となれば、絶対にあきらめなければならぬいくつかの資料がある。その中の最重要資料が、『NIPPON』である。対外宣伝雑誌『FRONT』が原弘のアートデレクションで、硬質な構成主義的デザインであったのに対し、『NIPPON』における山名文夫などのアートデレクションは、やわらかなしかし説得力ある図像表現を実現した。そこには、戦前における日本のグラフィックのモダニズムの完成された表現を見ることができる。海外を意識したが故の、『NIPPON』のグラフィックデザインに見られる、インターナショナルリズムとナショナルなものとの融合は、戦前日本のグラフィックデザインの白眉だといえよう。したがって、そこには、インターナショナルとナショナルなものをどのように考え位置づけたのかという、近代の難問を読み解くための重要な要素が歴史的事例として存在している。

近代日本のグラフィックデザインにかかわるこの重要な資料である『NIPPON』は、これまで一部の施設でしか見ることができなかった。それが今回、復刻されることは研究者にとってきわめてうれしいことだといわなければならない。



刊行当時の推薦文より

●ここには古い日本と新しい日本とがたくみに按配されている。日本の現状が感情生活、産業、教育、文化施設、その他あらゆる方面にわたって忠実にうつされている。写真は新鮮で美しい。じっさいこの雑誌を見ていると、日本の写真印刷の技術もここまでできているのかと、心強い気がする。

——谷川徹三(哲学者)

日本工房と『NIPPON』に関わった人々

【写真家】

- 名取洋之助
- 土門 拳
- 藤本四八
- 木村伊兵衛
- 渡辺義雄
- 小石 清
- 岡田紅陽
- 堀野正雄
- 金丸重嶺
- 岡本東洋
- 三木 淳 他

【デザイナー】

- 山名文夫
- 河野鷹思
- 亀倉雄策
- 熊田五郎
- 下島正夫
- 高松甚二郎 他

執筆した人々

- 堀口大学
- 野上豊一郎
- ブルーノ・タウト
- 菊池 寛
- 長谷川如是閑
- 鳥居龍蔵
- 井伏鱒二
- 広田弘毅
- 小泉信三
- 宮沢賢治
- 坪田譲治
- 有島生馬
- 石井研堂
- 吉川英治
- 横光利一
- 中川一政
- 浜田耕作
- 深田久弥
- 谷川徹三
- 小林秀雄
- 川喜多長政
- 芦原英了
- 与謝野晶子
- 矢田津世子
- 式場隆三郎
- 林芙美子
- 源 豊宗
- 勅使河原蒼風 他



●現在、欧米の写真入り雑誌もかなり多数あって、世界的に知られているものだけでも十指を屈するほど存在している。しかし『NIPPON』はイラストレーテッド・ロンドン・ニュースやパリのイリュストラシオン乃至はドイツ・イタリーの一流の画報に比べても決して遜色ないのみならず、美術眼から見て、たしかに『NIPPON』の方がまさっている。

——芦田 均 (戦後総理大臣、当時ジャパン・タイムズ社長)

